

法螺抜け伝承の考察

——法螺と呪宝——

斎藤 純

一、はじめに

本稿は、存在は知られながらも意味が十分分解明されていない「法螺抜け伝承」について、起源や他の伝承との関連を考える。この考察を通じ、一般には仏教法具やその材料と認められている法螺貝の民俗的イメージを明らかにしたい。さらに「法螺」にかかる慣用句の基盤にも言及しようと思う。

「法螺抜け伝承」とは、海産の巻貝であるはずの法螺貝が地中に潜み、風雨・土砂崩れといった天変地異とともに抜ける。その際、法螺貝は鳴動するというので、海や山で数千年を過ごした法螺貝が昇天したとされることもある。伝承の多くは伝説や世間話の形で伝えられている。簡潔で、よく知られた例は次のものだろう（以下、資料中の地名について現在のものを（）に補う）。

【類例二】 東京府檜原村（西多摩郡）の如きも多く此種の惨話を伝へて居るが、土地の人はホラガヒが山を抜け出ると山崩れが起ると謂つて居る。山崩れの原因を此怪異に帰するものは決して檜原村だけではなく、第一章に述べた富山県上平村（東砺波郡）旧桂部落千軒が山崩れの為に殆ど全滅したといふ伝説にもこれがあって、此所では其化物が山川海に各千年住み其処から出る時に悪業を働くものと謂つて居る（『山村生活の研究』[柳田 一九三七一一]）。

こうした伝承は近世初期まで遡る。静岡県浜名湖の今切（新居町）は中世の地震・津波・台風で湖岸が切れ海とつながった所だが、元和二年（一六一六）、当時の今切の成立に關する伝承が、林羅山の『丙辰紀行』に記されている。

【類例二】 遠州荒井の浜より奥の山五里ばかり。海となりて大舟も出入る。むかしは山につづきたる陸地なりしが。中比（頃）

山よりほらの貝おびた、しくぬけ出で海へ入ける。其跡かくのごとく海となりて。今切と名づくるよし。古老いひつたへたり（新居町史編さん委員会一九八六 四四五）。

羅山の記述は『東海道名所記』や『東海道名所図会』に採録されて有名になる。また、この法螺抜けは日記、隨筆、史書、本草書などでも紹介される（1）。元禄一〇年（一六九七）の本草書『本朝食鑑』の「宝螺（ほらがい）」の条にも、次のような記述がある。

【類例三】世間では、長大な数千の宝螺が、海中より土を穿つて山底に潜り、山をつき抜けて跳り出し、大洋に飛び入ると、巖岳が大崩れして江湖に変じると伝えている。遠州の荒井の今切は、近世（ちかごろ）そうして抜け去った痕なのであるといふ。この類は各處に多くあるが、まだその真偽については詳らかでない（島田富雄訳「人見一九七六 一一七」）。

天保一二（一八四二）年の妖怪画集『絵本百物語』は、暴風雨の中、竜のようなものが法螺貝から顔を出す図を載せ、「出世のほら」と題して次のような文章を記す。

昔よりあることにて、遠州今切の渡しも螺（ほら）の抜けた跡だという（多田克己訳「桃山人・竹原一九九七四七〇四八」）。近世、もつとも有名な法螺抜け伝承は今切のものだつた。しかし、これが今切に限らない伝承だつことは、辞書類に採られた近世文学の「法螺」「法螺貝」の用例で知られる。また後に紹介する近世地誌にも伝承の記載がある。近代のものだが、【類例二】をはじめ民俗学者が各地で採集した例も少なくない。

二、法螺抜け伝承の研究

法螺抜け伝承は、近世の本草学以後、民俗学で注目されるようになつた。その研究は少なく言及もわずかだが、簡単に振り返る（2）。

まず、南方熊楠が「本邦における動物崇拜」（『東京人類学雑誌』二六一三〇〇一九一「南方一九七一b八八」）、「田原藤太龍宮入りの譚」（『太陽』二三一「一三一九一六「南方一九七一a一三四一三六」）で法螺抜け伝承の起源にふれ、土砂崩れによる化石の出土が伝承を生んだと考へた。また、法具の貝笛を意味する漢語「法螺」と、洞・谷を意味する日本語「ホラ」の混同が原因かとも推定した。柳田国男も『山島民譚集』（一九一四「柳田一九七〇一七七」）でこれにふれ、貝笛「法螺」の材料「ほら」と山崩れ「洞（ホラ）抜け」の混同と

考えた（「蟻虫」）の考えが背景にあるともしているが、詳しい説明はない）。

南方も柳田も言葉の混同を想定したわけが、それだけで伝承の成立を説くのは弱い。南方の説く貝化石の出土説は興味深いが、検討された類例は少なく、伝承地の情報も乏しい状態での推論で、他の解釈の余地が多い。法螺抜けで残った貝殻が笛になつたという伝承もあるのだが、変質した化石が笛に加工できるだろうか。

このほか伝承の成立や意味を考えた研究は見当たらないが、宮田登『終末觀の民俗学』（宮田一九八七）は【類例一】の事例を紹介し、災害の民俗として位置づける。また、法螺抜けを扱つたものではないが、中世史の藤原良章が「法螺を吹く」〔藤原一九八九〕で法螺貝の呪術的機能を紹介し、その顯れとして伝承にも簡単にふれる。法螺貝の呪具としての性格は宗教民俗学の五来重も指摘したところだが〔五来一九八〇三五八〇三六二〕、修驗道と民俗の深いかかわりを考えると、考察にあたつて見落とせない要素である。なお、樂器の法螺貝については福井隼仁「法螺の研究——金峯山を中心に——」が歴史や奏法を概説する〔福井一九九〇〕。その中で、世界的に見られる貝笛の中心的役割として「宗教的儀式的使用」があり、「特徴的なのは水生動物であるということから、水と関係ある儀式、例えば雨ごいや豊穣の儀式に使われる」という指摘を紹介したのは注目される（3）。

三、各地の法螺抜け伝承（一）

以下、法螺抜け伝承を（一）（二）に分けて紹介する。（一）は、鳴動や風雨とともに貝が抜けたという単純な形のものである。

【類例五】半田町岩滑（愛知県半田市）に俗称にしの崖といふ所がある。昔与五郎橋の山から、螺（にし）の大きなのが出て七日七夜鳴き続いて半田池の北方にその姿をかくしたといふ〔にしの崖〕『愛知県伝説集』〔愛知県教育会一九三七二四五〕。

〔与五郎橋〕は現在の半田市宝来町二丁目〔愛知県半田市一九五七〕。「にしの崖」は、同地付近の渡辺真一氏（一九二三生。新生町四一四八）によると、半田池北側の崖の通称で半田市に隣接した阿久比町植の小字「陶ヶ峯」にあたる。ただし、氏は法螺貝の伝説自体は知らない（4）。

〔与五郎橋〕は、矢勝川流域の丘陵地で、かつては土砂の流出の激しい荒地の一角だった〔やなべの歩み編集委員会一九八五二〕。大正九年（一九二〇）測図二万五千分ノ一地形図〔半田〕には「流土」や「崩土」の記号が見られる。今は大部 分が耕地になるが、崖も残り、砂防指定地である。「にしの崖」

も同様な丘陵で「流土」「崩土」の記号が見られる。

この「にしの崖」は、渡辺氏によると付近で一番の高所だつた。『阿久比町誌資料編五自然』も町内最高の三角点（標高七六・七メートル）を紹介する（阿久比町誌編さん委員会一九九一一四）。つまり、貝が半田池の北側「にしの崖」に消えたと語っていたのは、付近の最高所に姿を隠したということで、伝説は法螺貝の昇天を語っていたと判断される。

【類例六】静岡県榛原郡榛原町に高尾山という山がある。その頂上南下の窪地に「法螺が池」という池があつた。池の東北は山頂からの尾根がそびえ「百間崖」という長い崖になつていて。山麓の榛原町坂口の井根幹一氏（一九二八生。榛原町坂口六）によると、百間崖が崩れて反対側に盛り上がり、谷をせき止めて出来たような窪地だった。井根氏によると、「池に法螺貝が住んでいた。法螺貝は海に帰りたいと鳴いていた。その声があり不気味で恐ろしいので、池の下にあつた岩根家（屋号シンヤ）は現在地（現・岩根富一家。榛原町坂口六）に引っ越した。ある日、細引（紐）のような大雨が降り、法螺貝は土砂崩れと一緒に海に帰った」という。山には岩根家の元屋敷という土地も残る（筆者調査（5））。

町程も隔てて一夜の内一丈斗りも下へ地墜入し事。近年明和年中に有り、今残りて有偏へに地裂けて落入りし也」という記述がある（藤一九九一二五二）。桐田栄『遠州高尾山龍門山石雲院史』は、これを「法螺が池」「百間崖」に比定する（桐田一九八〇一八四）。崩壊が明和年間（一七六四～七二）かどうかはともかく、享和三年（一八〇八）にそうした地形と窪地があつたことがわかる。

また、桐田は寛政三年（一七九二）六月に石雲院が出した境内の報告書を抄出・紹介している。その中に「山中谷間十アリ。中有天宮谷、地獄沢、百間崩」という記載があり（桐田一九八〇一八〇）、「有六本松。門前大路有龍門橋、左有登龍藤、右有七色木、臥龍松。合有十三境」といった記述が続く。列举された名称から推定して、百間崩（百間崖）も何らかの伝承を持つ靈地だったと考えられる（6）。なお、法螺が池も百間崖も、山頂もろとも静岡空港の建設工事で削り取られている。

【類例七】本村（賤機村 現・静岡市牛妻等）ハ 安倍川ノ沿岸即チ其ノ流域ヲ制限シ 人為的ニ作リタル平野多キヲ以テ古来洪水ノ慘害ヲ被リタルコト數多ナルベシト雖モ 往古ノ事ハ漠トシテ考フベカラズ（中略） 尚口碑ニ残レル洪水ニテ 子年ノ荒トテフアリ コレハ安倍川奥山中ヨリ法螺ノ貝ガ出土ルニ依リ ソレニ伴ヒテ山津浪ガ出タルモノナリト云ヒ伝フ（追考スルニコノ洪水ハ文政十一年六月ノ大洪水ヲ指スナラン）（中

高尾山には曹洞宗石雲院がある。享和三年（一八〇八）『遠江古蹟図絵』の記事「石雲院の化生之僧」に「此の寺の近辺に二

(略) 其ノ当時里謡及迷信等今尚口碑ニ残レルモノヲ左ニ掲ゲン

(中略) / 迷信 安倍奥山ノ字大まゝ、ト云フ所ニ尚一ツノ法螺ノ

貝アリ 後世大洪水ノ惨害恐ルベシト云ヘリ [駿機村 一九一三

第十章「雜洪水」]。

大正二年(一九一三)と推定される『駿機村誌』の記載である。安倍川流域は山崩れや洪水で知られ、上流に日本三大崩れの一つ「大谷崩れ」がある。奥地に「蛇拔沢」「新蛇拔沢」などの地名があり、土石流は大蛇が抜けたものという伝承的觀念がうかがえる〔八木 一九九七三八〕。駿機は中流域の村だが、やはり土砂崩れを超自然的生物の仕業とする考えがあつたことがわかる。

なお、同村誌は同章「雜洪水」で、牛妻地区のもう一つの洪水伝承を記す。すなわち、道白和尚の開いた行翁山の寺院・鐘樓が一夜の山津波で押し流され、鐘が鳴り響きながら谷を下り、安倍川の淵に沈んだ。それで谷を「鳴沢」と名づけたといふ。鐘がしばしば龍と関係づけられる点を考えると興味深い。

文久元年(一八六四)の地誌『駿河志料』の「駿東郡 五柳沢」に記された伝承である。石は現在も静岡県沼津市柳沢の高橋川の渓谷にある。文政三年(一八二〇)の『駿河記』も、「岩の腹に螺の出たる穴あり。内を窺に貝の巻たる跡あり」と紹介する〔桑原 一九三三三九〇〕。法螺貝は高橋川の下流、沼津市の原地区で海に入ったというが、大正二年(一九一三)『原町誌稿』の「法螺貝」の記述は次のとおり。

昔柳沢ノ渓間ニ怪物住ミ風雨ノ夜ハ必唸声アリ 或年ノ初秋ノ薄暮渓上雲ヲ生シ風ヲ起シ見ル間ニ雷電ハタメキ 怪物ハ亦異声ヲ發シテ咆哮ス (中略) 始メハ渓谷ヨリ荒シ初メタルモ時々刻々南シテ黎明ニハ当町ノ海岸松林ニ達シタル (中略) 夜明ケテ怪物ノ通路ヲ跡スレバ 柳沢ヨリ高橋川ヲ下リ 東縦川ニ沿ツテ大帶ヲ引キタルガ如キ 一条ノ痕跡地上ニ印ス 人々始メテ知ル 古來柳沢ニ住スト聞キシ法螺貝 既ニ千歳ノ寿ヲ重ネ 風雨ヲ起シ爰ニ海ニ入りタルナリト 現時柳沢八丈岩下ノ穴ハ 其ノ法螺貝ノ出シ跡ナリト云フ [原小学校 一九一三 「四古事来歴(八) 口碑伝説」]。

〔類例八〕〔三つ石〕或は八畳石とも云、畳八枚を敷べし、故に然云ノ溪流の中に大きなる巖三つにわれてあり、古へ此巖割て螺貝出しとて、巖の高九尺許上は平らかにして、四丈八九尺に三丈六尺許もあり、巖の中腹に螺貝の抜出し跡の割口高六七尺許もあり、貝の巻たる貌ち巖に残れり、其抜出し時代は知らず、

八畳石の西方の尾根に赤野觀世音がある。この觀音には次の

ような洪水伝説がある。

年経た法螺が出たのだという「大池の法螺」「牟婁口碑集」
〔雜賀 一九二七 八四〕。

宝永年間（一七〇四～一二）の洪水の時、柳沢の西北で「水が出来るぞ、急いで山に逃げよ」としきりに呼ぶ声がした。村人は驚いて逃げた。その後、声のしたあたりを探すと、大石の上に杖と沓の跡があつた。人々は赤野觀音が現れて教えてくれたと思い、いつそう信仰した。この石を「人呼び石」といった（筆者要約。『鷹根村誌』〔沼津市史編さん委員会 一九九六 一九〇〕原著一九一三）。

この伝説について、赤野觀音を訪れた弘法大師が洪水を知らせたとする別伝もある（沼津市教育委員会社会教育課 一九九五 一四二～一四五）。『白髭水』と同類の伝説だが、これらの伝説は、超自然的存在が洪水を起こすという考え方を示すものとされている。敷衍すれば、にわかに出水は別世界から来るという観念を想定できる。柳沢の法螺貝の抜けた場所は、そうした水の出る所だった。

昔、田辺市西之谷の籠屋に娘がいた。この娘は池に行きたがった。娘は、針や剃刀・鎌があると言つて他の池を嫌つた後、堅田の大池に来た。娘は銀の簪と下駄を残して飛び込み、龍になつた。龍は暇乞いに現れ、無害を誓う歌を詠んだ。簪と下駄は池の傍に祀られた。この簪を持ち帰ろうとすると動けなくなつたという（筆者要約。〔那須 一九三〇 一一四〕）。

【類例九】西富田村（和歌山県西牟婁郡白浜町）の大池から昔法螺貝が出た。申の歳とかの大水の時、日も七つ下がりのころ、張り流れる大水の中に黒い大きなものの浮いて行くのを見た。すると後に池に洞穴が出来ていた。法螺貝は海に寿を保ち神通力を得て大蛇となり殻を抜けて出るもので、その大水の時三千

南方熊楠が記した別伝によると、昔、大池の大きい方の池に蛇が来て主になろうとした。村人は先に鎌を沈め、これが池の

主だと言つた。蛇は怖れて小池の方に入った。それで大きい池の祠に鎌を祀り、小池に蛇を祀るという。明治三八年（一九〇五）頃、南方が付近で聞いた伝説らしい「白浜町誌編さん委員会一九八六・六八七」。

本伝承について、大池に水神の弁天が祀られていたこと、また、龍や蛇を池の主とする伝説があつたことが注目される。法螺貝の抜けた堅田の大池は、水界の超自然的存在が棲む場所だったわけである。また、【類例九】をみると、年を経た法螺貝は、池を抜けると同時に殻を抜けて大蛇になると語られている。大蛇はしばしば龍と同じ役割を果たすが、【類例四】の天保一二（一八四一）『絵本百物語』も法螺貝から龍が出るという考えを記していた。つまり、法螺貝の本体は龍であり、貝殻はその仮の居場所だという観念が、少なくとも近世後期に広まつていたことがうかがえる。

四、各地の法螺抜け伝承（二）

続いて各地の伝承を紹介する。（二）は、法螺抜け伝承に、貝笛用の法螺貝を入手したという要素を伴うものである。

【類例一〇】阿久比村大字宮津（愛知県知多郡阿久比町）に俗称螺側といふ所がある。昔此所の地の中から大きな喰る声があるので村の若者が見張つてゐた処其の声益々大きくなり、其の

中に地中から法螺貝の大きなのが辺り出て付近に大風を巻起こした。其の中の二匹を捕らえたが三匹は天上高く飛び去つたといふ。捕へた二匹の中一匹は現在宮津にあつて洪水の時、人寄をする際鳴らすものとなり、他の一匹は亀崎町大字有脇（半田市有脇）に与へたと伝へらる（「螺側」『愛知県伝説集』〔愛知県教育会一九三七・一四五〕）。

阿久比町宮津の俗称「螺側」での話というが、『阿久比町誌編一 村絵図』〔阿久比町誌編さん委員会一九八六〕で宮

津の小字名を見てもそれらしき地名はない。一方、同町横松に「西側」の小字名がある。ここは大府丘陵南端の崖下にあたり、「西池」という池があり岸に神社が祀られていた。おそらく宮津の「螺側」は、横松の「にしがわ」の誤りだろう。

伝説では、貝二匹が宮津と有脇に伝わったというが、宮津・横松でそうした話は聞けない。また、有脇の郷土史家で福住寺住職だった近藤英道の『有脇の昔話』〔近藤一九九二〕にも記載はない。故・近藤氏の夫人ふじ子氏（一九二五生。有脇町六一八）に尋ねたが、それらしい話は聞かなかつたという（7）。とはいゝ、由来のまつわる対象がなければ、こうした言及は意味がなかつたはずだ。つまり、伝説が語られていた頃、そういう法螺貝が存在していた。少なくとも記憶はあつたと推定できる。もつとも、それが洪水時の人集めに使われたという点は、怪事件で入手した貝の使い方にしては解せない。来歴の神秘性

に見合うような、洪水の前兆にかかる働きが伝えられていたのではないだろうか。

【類例一一一】往昔伊勢の海より地下をくゞり来つたほら貝

真福寺（愛知県岡崎市真福寺）境内にて七日七夜鳴動して後天に昇つたといふ。その抜穴が現に存在してゐて土地の人ほら貝穴と云つてゐる。此のほら貝大さ三斗七升入と云ふ（「ほら貝穴」『岩津町誌』〔加藤 一九三六 三五九〕）。

靈鷲山降剣院真福寺は矢作川東岸山中の天台宗寺院。本尊は水体薬師という。本堂内陣に八角の宝殿があり、泉の上に建てられたもので、靈泉そのものを本尊とする。境内は南北に延びる尾根と、鞍部の平地で、北側の尾根に本堂が南面して建つ。一方、南の尾根を背にして開山堂があり、尾根の中腹に「法螺貝の穴」がある。脆そうな花崗岩の崖に北向きに開いた穴で、高さ約二メートル、幅約三メートル、奥行き四～五メートル程。奥は南に延び、ほぼ伝説でいう「伊勢の海」の方向である。

この【類例一一一】は前章の（二）に相当する簡単な法螺抜け伝承だが、法螺貝穴の参道入口に次の伝承を記した看板がある。真福寺に照会したが、文献などの出典は確認できないようだ。口承の寺伝といえよう。

ある時、真福は宇祢部（岡崎市畝部東町・西町）の原で子供にいじめられる青い小蛇を助けた。蛇が姿を消す時、黒雲がわき雷がなり、風雨激しく大水になつたが真福は少しも濡れない。

その夜、彼の夢に海竜王の娘という女童が現れ、お礼に海中の

同じ場所にまつわる伝承であり、二つの伝承が相互に関連したものであることがわかる。なお、宝暦二年（一七五二）「三河国額田郡真福寺年序」に、寺院の再興者の石塔は「本堂の螺貝穴ノ辺ニ有リシ由」という記述がある。当時から「螺貝穴」の名称があつたわけで、法螺貝にちなむ伝承の存在も推測される（「岩津の史跡と文化財編集委員会 一九八三一二二」）。

本尊が泉であることからわかるように、真福寺は水に関した靈地である。寺伝によると、推古天皇の時、付近に住む「真福（まさち）」という者が靈光に導かれて山中に入り、清泉を発見した。泉の中から「良藥今留在此」と声がして薬師如来が現れ、また水中に消えた。この水を水体薬師として祀つたのが寺の始まりという（「加藤 一九三六 三五七～三五九」）。

このように真福寺は地下から水の恵みがもたらされる場所だった。開山の真福には、次のような伝説もある。

か、この穴よりホラ貝が掘り出され、この貝を吹き進軍すれば、勝利を得ることができたと古記に記されている。穴中に地蔵尊を祭る

宝物の犬を贈つた。一日三升の精米を犬に食べさせると、三升の砂金を吐き出す。真福は富豪となり、真福長者と呼ばれた（筆者要約。〔加藤 一九三六 三五七一・三六一、岩津の史跡と文化財編集委員会 一九八三一四一～一四三〕）。

真福寺を開いた人物が、龍のいる水界から宝物を受け取つた。その真福寺も、地下から水の恵みが現れる場所だつた。両伝承で、幸をもたらす水界は同一の世界と考えてよいだらう。すなわち、龍が棲み、水にかかわる、この世の下の別世界、いわゆる「龍宮」である。こうした世界から宝物を授かるという観念があつたことは、「海神小童」「海神宮考」などの論考で柳田国男が指摘している〔柳田 一九六八一九六九〕。

真福寺がこのような世界に通じているならば、法螺貝穴も龍宮への通路とみなせる。そう考えると、〔類例一一二〕の伝承に登場する「勝利をもたらす法螺貝」の性格がよく説明できる。つまり、かの法螺貝は龍宮の呪宝だったのである。これは、〔類例一一二〕の法螺抜けにあてはめてもよいだらう。すなわち、鳴動し昇天した法螺貝も龍宮からきたという観念が想定できる。すでに〔類例四・九〕に関して指摘した「法螺貝は龍の一種であり貝の中には龍が潜んでいる」という伝承も、こうした推定を支えるものだ。〔類例一一一〕の法螺貝の鳴動は暴風雨を暗示するが、これも龍宮の力——富とは別な形をとつた超自然的な水界の力の表現と考えられる。

【類例一二】慶長十九年五月大雨ふりし時、薦野村（福岡県吉賀市）のうしろの山より法螺の貝三出、山のふもと横二間、長二町許、深さ四ひろ程地くづる。今に其跡あり。其貝二は流れて海に入。貝の大なるは一匁余り、其次は一匁許、其次は流れ行を里人是をとる。其後竈門山福仙坊に寄附す。今にあり。是清滙の檀那寺なればなり。彼三のほらの貝流れゆく時、甚鳴おめく。音夥し。里人おそると云伝ふ〔福岡県 一九三三四三八〕。

貝原益軒による元禄一六（一七〇三）の地誌『筑前国統風土記』「薦野、米多比」の記述である。「竈門山」は福岡県太宰府市の宝満山。修驗道の靈場で、近世には楞伽院を中心とした二五坊が筑前・筑後の末寺末社を支配した〔中野 一九七七〕。「福仙坊」の坊名は見当たらないのだが、寛政一一年（一七九九）『筑前国統風土記附録』、「竈門神社」の項によると東谷に「福泉坊」がある〔加藤・鷹取 一九七七a一二五三〕。これをさしたものだらう。

「清滙」は薦野村の枝村。天台宗の瑠璃光山行基院清滙寺がある。文政四年（一八二二）『筑前名所図会』も〔類例一二〕の伝承を紹介するが、「藥師堂の下より法螺貝三つ出たり」と境内に場所を特定している〔奥村 一九八五八一三～八一四〕。清滙寺住職の平野清信氏（一九四五生。薦野六六五）によると、砂防工事以前、清滙付近はよく崩れた。寺の谷も崩れ、門

前の道がなくなつたこともあつた。普段、水は少ないが、雨が降るとよく水が出る。法螺貝の話はその音の話かと思う。水の出る音が法螺貝の音に似ていたのだろう。貝が出た場所は薬師堂の谷だと昔の人から聞いた。今は枯れているが薬師堂の谷には水が湧き、溜める所もあつた。植林前の雑木林の時、よく水が湧いていたという（9）。

清滝寺は以前の山号を「長流山」といい、山中の滝にちなむ名とされていた。文政一年（一八二八年）安政四年（一八二八年）五七）成立の『筑前国統風土記拾遺』、「清滝寺」の項に次のような記述がある〔青柳 一九九三b 一五四～一五五〕。

清滝に在り。瑠璃光山行基院と号す。天台宗松源院に属す。天平年中行基法師開基なり。山中に瀑布七ヶ所あり。其下流各落合て寺前の川に出ツ。故に古へは長流山と号す。近世に今ノ号に改むと云。（中略）／清滝の後の山中七町計に大岩三ツ有。（中略）不動明王矜伽羅制多伽の三体と称す。昔は其辺に熊野社ありし故に、その所を權現谷と云。極て険阻なり。此寺往昔は巨藍にて僧坊も多くあり。（中略）／當寺境内に清滝權現社あり。また貴布祢社 弁天 藥師 大日堂 開伽水及不動拌石有り。本尊藥師仏並脇侍日光 月光 十二神将共に古仏なり。行基の作と云。（後略）

「權現谷」の三つの大岩には、北九州の山を巡る修験者が立

ち寄つて祈祷したと伝える。現在も信仰があり、清滝寺の奥の院といった位置づけである。場所は薬師堂背後の谷を登りつめた山腹、つまり、法螺貝の抜けた谷の始まるところといえる。「長流山」の山号の伝承からわかるように、清滝寺は滝や水流に關して注目されていた。境内に水神の貴布祢社や弁天を祀り、一帯は水に関した靈地だつたと考えられる。この靈地の水源から、法螺貝も抜けたのである。

【類例一二】では、そうした法螺貝が修験寺院の「福仙坊（福泉坊）」に寄付されている。用途が記されていないが、法螺貝は修験道の重要な法具であり、呪具でもあつた。清滝から出現した法螺貝も、そのように使われるべきものと思われていただろう。

五、法螺貝の由来譚

前章で各地の法螺抜け伝承を紹介した。その中に貝笛用の法螺貝の入手という要素を伴う伝承があつた。従来注目されなかつた伝承だが、貝笛の方に視点をおいてみると、法螺抜け伝承は、その由来譚になることがわかる。一方、いくつかの法螺貝の由来譚を検討すると、法螺抜け伝承に通じる特徴を持つものが見つかる。法螺抜け伝承と法螺貝の由来譚には、少なからぬ関連がうかがえるのである。以下、こうした特徴をもつ由来譚を紹介したい。

【類例一三一一】昔、知古（福岡県直方市）に大池という古池があり、毎年池祭りをしていた。寛永三年（一六二六）、例によつて池の大楠のそばに祭壇を設けて多数の山伏が祈祷をしてしまつた。遠賀郡水巻村の鵜五郎という人が池中に入り鈴を探したところ、楠の根の深い池底に三、四畳もある大きな石があり、そこに雄雌二匹の法螺貝が棲んでいた、鵜五郎はその二つを捕つてあがつてきたので村人はこれを古町の聞名院に奉納した。それから後、年々の池祭りに、この法螺貝を吹き鳴らすと池底に残つたもう一つの法螺貝が「ウォーウォー」と悲しそうに鳴く声が聞こえていたということである（『直方市史』下

〔直方市史編さん委員会 一九七八 一〇三四～一〇三五〕）。

『直方市史』によると、知古の大池は同市上新入の通称「池の上」（10）から東南にあつた池で、明治三年（一八九〇）鉄道敷設で埋め立てられた。「昔は下境の長池からこの池に大河が続いており、池の淵に古楠の大木があつて、そのあたりは最も深くて底知れず龍宮へ通じているといわれていた。直方在城のころは禁殺の池であつて無数の魚類が繁殖していた」といふ（直方市史編さん委員会 一九七八 一〇三二）。池の上には貴船神社があつた（直方市史編さん委員会 一九七一 八九七）。

『筑前国統風土記拾遺』三一鞍手郡「知古村」には、「村の東に

大池とて沼あり。旱歳には雨を祈る事有。往古の川址也と云。今直方川ハ其東に在〔青柳 一九九三a 三一七〕とある。近世に大池で雨乞いをしていたことがわかる（同書「鞍手郡」の取材は天保七年（一八三六））。

法螺貝を納めた聞名院は福生院ともいつた。明治初期の報告書「一小区三村之内直方町」に、「聞名院（割注 護摩堂一間四面、寺地二畝二十歩、祈禱檀家八五二戸） 古町ニアリ、当山派修驗、山城国醍醐三宝院末ナリ、開基ノ僧ヲ、千手院臨海ト云、寛永二年乙未（丑カ）、創建ス」とある（紫村 一九八三九九）。古町は近世直方の町場でもっとも早く開けた地区で町の中心地。天明六年（一七八六）「鞍手郡直方由来記」は次のとおり。

「一、福生院 真言宗 当山流見身山 山伏／護摩堂（割注略） 本尊不動明王（割注 略） 荒神 愛染明王（割注 略） 庚申（割注 略） 青面金剛（割注 略） 大黒天（割注 略） 役行者理源大師（割注 画像両軸あり山城国醍醐寺御門跡の命を承り大僧都定隆の筆也）（紫村 一九六一 三三二）」

記述でわかるように、寛永二年（一六二五）、千手院臨海の開基と伝える修驗寺院である（11）。【類例一三一一】に登場する山伏は、この聞名院に関係した山伏だろ。その山伏が奇怪な事件で法螺貝を入手したわけだが、法螺貝の鳴動は一般に風雨を呼ぶとされており、同類の鳴き声を喚起する貝笛は、風雨を操る力を認められていたはずだ。おそらく大池の雨乞いに

も使われたのだろう。

こうした呪宝を、龍宮に通じる場所から得たのであり、それは鳴動する法螺貝の殻だった。この貝は、大雨による紛失物の探索で発見されたのだが、風雨＝法螺貝の活動という観念を参考照すると、最初の大雷についても法螺貝の仕業という暗黙の前提が読みとれる。とすれば、法螺貝の活動＝風雨の被害＝貝の出現（発見）－呪宝の入手という、法螺抜け伝承と共通の構成が指摘できる。この構成で、貝の出現発見について人間の行為を強調し、呪宝の入手を詳しく語ったものが【類例一三一一】の伝承である。一方、出現（発見）について法螺貝の行為を強調し、活動と風雨の被害を強調したものが法螺抜け伝承になる。

このように、知古大池の怪異譚であり、聞名院の法螺貝の由来譚でもある【類例一三一一】は、法螺抜け伝承ときわめて近い伝承といえる。

一方、知古の大池には、次のような伝承もある。

【類例一三一一】村の西二町餘に池あり。寶永三年雨をこひし時池中より鈴及法螺貝などとりあげしこと里民の説あり。信するにたらす〔加藤・鷹取 一九七七b 一四三〕。

【二】と【二】の伝承のうち、歴史的にどちらが早いかは難しい問題だが、両伝承の核に、「龍宮に通じる池から威力ある法螺貝や鈴といった呪宝を入手する」という観念が指摘できる。それを簡潔に記したのが【二】、膨らませた伝承が【二】といえるだろう。そして、この【二】は、法螺抜け伝承に大変近い。つまり、法螺抜け伝承も、「龍宮から法螺貝などの呪宝を入手する」という観念をもとに発達した伝承と考えられるのである。

六、龍宮の呪宝の由来譚

寛政二年（一七九九）『筑前国続風土記附録』の「知古村」の記述である。時代が異なつて伝えられているが【類例一三一】と同じ事件の別伝とみなせる（12）。池の方角が違うのは

龍宮から法螺貝などの呪宝を入手する伝承は、実例が存在す

る。以下、簡単に紹介する。

寛永年間（一六二四～四四）成立とされる修験道の教典『資道什物記』に次のような記述がある。

【類例一四】就中、曩祖行者〔役行者〕、箕面の滝より龍樹の浄土に入り、菩薩に值遇し奉り、先身の時（役氏は迦葉尊者の後身なり）所持の商信〔シャンカ＝法螺貝〕及び十二の什物等（什とは雜なり）を伝授し、世間に劫來して群生を利す。其の法螺は大峯に在り今猶ほ既に存す〔服部一九七一一〇一～一〇二〕。

なお、中世～近世初期の箕面の滝を描く役行者の絵巻や伝記を見ると、龍がいたり、雨乞いに靈験のある龍穴があつたり、水中を暗示する表現など〔宮家一二〇〇八〇、石川・小澤一二〇〇九二〕、まさに龍の棲む水中の別世界、龍宮を思わせる。龍樹の浄土は、伝承上、龍宮と重ねてイメージされていたといつてよい。

はつきりした修験寺院以外にも、龍宮から法螺貝を含む呪宝を入手した伝承を持つ寺がある。

和歌山市名草山山腹に紀三井寺がある。その名は「紀伊にある三つの井戸の寺」という意味の通称で、清淨水、楊柳水、吉祥水の三つの泉が境内の斜面から湧き出している。

天保一〇年（一八三九）『紀伊続風土記』、「紀三井寺村」の条の縁起によると、同寺は宝龜元年（七七〇）、唐の渡来僧、為光上人が名草山の靈光に導かれて觀音像を發見し創建した。ある日、大般若經を境内の経塚に埋めようとした時、急に美少女が現れた。上人が訊ねると、少女は清淨水に入つて龍になり、千年この山に灯火を灯して來たが今後も続くだろうと告げた。今も七月九日になると山中の松に「龍燈」が現れる。以下、縁起は次のように続く。

山伏の頭襟や鈴懸などの道具についても同様な伝説があり、役行者が箕面で龍樹菩薩に灌頂を受けたという広く伝えられた修験道の伝承の一環なのだが、『資道什物記』は特に法螺貝をとりあげ「其の法螺は大峯に在り今猶ほ既に存す」と記している。こうした伝承の付会された法螺貝が修験の聖地大峰山（奈良県）にあつたのだろう。

【類例一五】一日龍神來りて上人を請し共に水府に入る。帰るに及びて七種の宝を贈る。法螺一、如意一、香炉一、桜樹七、応同樹一、柏葉ノ錫杖一、鐘一なり。六種は上人携へて帰る。

鐘は後チ海畔に浮ひ出つ。人々牽けとも動かす。上人撫摩すれば鐘自鳴る。其ノ声清亮なり。布を以て松樹に繋げ、鐘紐に連ねてこれを牽くに、運動心のまゝなり。終に寺樓に懸けて六時を報す。土俗布引松といふはこの縁なりといふ（割注 略）。右、七種、乱世に紛失して今存するものは錫杖と應同ノ樹となり（句読点を付した。「仁井田一九一〇a三三〔八〕」）。

縁起は鐘と布引松が中心だが、寺院の開祖が龍神の水府（水の都）から入手した宝に法螺貝が含まれているのが注目される。

文化九年（一八一二）『紀伊国名所図会』卷之五、「紀三井山護國院金剛宝寺」の縁起もほぼ同じだが、上人は龍女（少女）に従つてただちに海中に赴く。また、海中の別世界をはつきり「龍宮」と表現している〔高市・西村一九八五・三二三〕。

なお、紀三井寺を詠んだ林羅山の漢詩「紀野三井寺」に、「昔、一僧有り。常ニ觀音ヲ信ズ。此ノ處ニ住ス。一旦、龍神來り請フ。僧、乃チ俱ニ水府ニ入ル。其ノ帰ルニ及ンデ、神、一ノ貝、一ノ錫杖ヲ授ク。其ノ後、一ノ梵鐘有リ。海畔ニ出ヅ（句読点を付し読み下した）」という一節がある〔京都史蹟会一九七九三四～三五〕。元和七年（一六二二）の紀行「西南行日録」に収められたもので、海中の別世界の龍神から法螺貝、錫杖、鐘などの宝を授かるという伝承が、近世の初めに遡ることを示している。

前章で「龍宮から法螺貝などの呪宝を入手する」という観念を含む伝承を紹介した。箕面、紀三井寺など滝や泉で有名な靈地の伝承である。いすれも近世初期の文献に記載があり、当時、このような伝承が水にかかる靈地に流布していたと考えられる。こうした観念を核にして、第四章で紹介したような、貝の入手をともなう法螺抜け伝承が展開する。その可能性は、第五章で知古の大池の事例をもとに検討した。

これら法螺貝の入手をともなう法螺抜け伝承から、この世の下にある龍の棲む水界という観念が弱まり、また、呪宝入手の要素が脱落し、貝の威力を強調していく表現のみが伝わると、風雨・洪水とともに地下から現れる怪奇な法螺貝の伝承になる。このようにして第三章で紹介した法螺抜け伝承が成立したのだろう。こうして怪異譚に近づいた伝承の中にも、龍や水の靈地との関係を示す要素がみられるのは、本稿の推定を傍証するにあたる。

ちなみに、やはり林羅山が記録した【類例二】の今切の法螺抜けも近世初期の伝承である。現在のところ、これがもつとも古い伝承らしい。一方、呪宝の法螺貝を入手する伝承は、どこまで遡るか不明である。こうした段階では、歴史的な先後関係の推定は今後の課題といえる。しかし、少なくとも近世以後法螺貝入手譚と法螺抜け伝承は、貝の入手を伴うものも伴わな

七、おわりに——「法螺」と呪宝

いものも、ほぼ併存している。この間、伝承の展開は比較的短期に起き、場合によつては相互の転換も起きたのではないか。

以上、法螺抜け伝承は「龍宮から呪宝の法螺貝を入手する」

という観念が展開したものであることを論じた。さらに、筆者は、法螺貝の呪力の源泉は「貝に龍が潜む」あるいは「貝が龍の棲む世界に通じる」という観念に關係し、龍宮の富や力を操作する道具、あるいはそれが行き来する通路とみなされたことに由来すると推定している。「法螺を吹く」ことは、この世に別世界の存在や力を呼び出すことであつたと考えるのだが、この点は稿を改めたい。

なお、近世の語彙で「ほら」は「思わぬ儲け」や「幸運」も意味していた。『近世上方語辞典』は、これを次のように解説する。

[注]

(1) 日記・隨筆・史書の記述は「震災予防調査会一九〇四、都司一九七八、新居町史編さん委員会一九八六」が収録。本草書は「大和本草」「和漢三才図会」等。なお、法螺抜け一般に言及するものに「怪異弁談」「本草綱目啓蒙」。

(2) 法螺抜け伝承の研究は「齋藤二〇〇一b」でも紹介した。(3)「福井一九九〇三三三」もとは「コラール一九八五二一〇」のオセアニアに関する概説だが、日本にも当てはまる伝承がある。貝笛と水の信仰との結びつきは「ザックス一九六五年・寛潤大臣氣質一ノ一(後略)〔前田一九六四一〇四一、一〇四二〕」。

も参照。

『角川古語大辞典』も同様な解説で、「法螺掘り出したやうな」という表現を追加する〔中村・岡見・阪倉一九九九三四〇〕。

法螺抜け伝承を参考した解釈は大変興味深く、「儲け」「幸運」の意外性や突發性はよく説明できる。しかし、その「儲け」や「幸運」のイメージ自体の淵源はどうだろうか。本稿は、法螺抜け伝承の展開の核に「龍宮から呪宝の法螺貝を入手する」という観念を指摘した。それが、なお伝承の背後に伴つていたとしたら、「法螺を掘り出す」ことはまさに龍宮の富や力を手にすることになる。こう考えれば、解釈はさらに行き届くと思われる。

(4) 岩滑は二〇〇一・三・三〇調査。

(5) 高尾山・坂口は二〇〇一・三・二八調査。なお、榛原町の伝説集に、高尾村を訪れた僧が人身御供を要求していた法螺貝を退治し、助かった子供が石雲院を開いたという話が記され【榛原町教育委員会 一九七五 二四〇二五】、再話で広まつている【榛原町民話収集グループ 一九八六 五一一六】。伊根氏らは地元の話と違うと憤慨したこともあったという。

(6) 桐田氏は寛政三年六月の文書に記された石雲院【十三境】について「螺貝池」を含む三つの名所を注記する【桐田 一九八〇 一八一】。その典拠が記されていないのだが、桐田氏の斎藤宛私信【一〇〇一・五・一五】によると報告書各所で散見した記述。報告書は冊子だが表題は失念。石雲院所蔵文書で茶箱五、六箱ある古文書のうちの一つという。「螺貝池」が寛政三年（一七九一）に遡る可能性を示すが、確認できないのが残念である。

(7) 宮津・横松・有脇は二〇〇一・三・三一調査。宮津で光西寺住職、高齢者四名に尋ねたが地名「にしがわ」・伝説とも知られず。また、横松で高齢者二名に尋ねたが、地名「西側」や「西池」は知られているが伝説は聞けない。なお、【類例一〇】で貝が出た「此所の地の中」や「地中」の「地」は「池」の誤植かも知れない。

(8) ただし、『筑前名所図会』は清瀧寺の「瀧」を「龍」、「菰野」を「筵野」、「福仙坊」を「福山坊」とするなど誤記が目立

つ。

(9) 薦野の調査は、二〇〇一・四・一四

(10) 直方市上新入一六〇〇付近の字「明神」の一部。

(11) 天明六年（一七八六）『鞍手郡直方由来書』に「古町の事寛永三年より市中となる。家作材木無代銀にて押領。小間数四百六拾戸間五尺七寸竈数百拾軒出来す【紫村 一九六一三二】』とあり、聞名院の開基（寛永二年）は町の始まりとほぼ同時と伝えられていた。さらに【類例一三一一】の伝承では、やはり聞名院や古町の誕生と同時に伝えられる。この点が非常に興味深いが、寛政一一（一七九九）『筑前国統風土記附録』（後掲【類例一三一一】）は、法螺貝出現を「寶永三年」（一七〇六）と記す。古記録の「寛」と「寶」とを誤ったらしいが、どちらが本来の伝承か。書写や伝来の信頼性では『筑前国統風土記附録』。一方、伝説の年代は歴史上のトピックに付会されやすい点を考えると「寛永」か。もつとも「寛永」の年代を記すのはどれも近代の文献で典拠不詳。いずれも確認できないのが残念である。

(12) 前掲注（11）

〔参考文献〕

愛知県教育会 一九三七『愛知県伝説集』郷土研究社

愛知県半田市 一九五七『半田市新町名新地番説明書』二
青柳種彦（廣渡正利・福岡古文書を読む会校訂）一九九三a

『筑前国統風土記拾遺』中 文献出版

——一九九三**b**『筑前国統風土記拾遺』下 文献出版

阿久比町誌編さん委員会

一九八六『阿久比町誌 資料編一 村
絵図』阿久比町

——一九九一『阿久比町誌 資料編五 自然』阿久比町

新居町史編さん委員会 一九八六『新居町史 第四卷 考古・古
代中世資料』新居町

石川知彦・小澤弘編 二〇〇〇『図説 役行者 修驗道と役行者
絵巻』河出書房新社

岩津の史跡と文化財編集委員会 一九八三『岩津の史跡と文化
財』岩津小学校同窓会

奥村玉蘭（田坂大蔵・春日古文書を読む会校訂） 一九八五

加藤一純・鷹取周成（川添昭二・福岡古文書を読む会校訂）

一九七七**a**『筑前国統風土記附録』上 文献出版

——一九七七**b**『筑前国統風土記附録』中 文献出版

加藤錫太郎 一九三六『岩津町誌』岩津町役場

京都史蹟会 一九七八『遠州高尾山 龍門山石雲院史』桐田栄

桐田栄 一九八〇『林羅山詩集』上ペりかん社

桑原藤泰（足立鉢太郎校訂） 一九三二『駿河記』下 加藤弘

——一九七七**a**『筑前国統風土記附録』上 文献出版

加藤錫太郎 一九三六『岩津町誌』岩津町役場

京都史蹟会 一九七八『遠州高尾山 龍門山石雲院史』桐田栄

桐田栄 一九八〇『林羅山詩集』上ペりかん社

桑原藤泰（足立鉢太郎校訂） 一九三二『駿河記』下 加藤弘

——一九七七**b**『筑前国統風土記附録』中 文献出版

太郎 一九八〇『修驗道入門』角川書店

五来重 一九八〇『人間と音楽の歴史 オセニアニア』音

P. コラール 一九八五『人間と音楽の歴史 オセニアニア』音

樂之友社

近藤英道 一九九二『有脇の昔話』近藤ふじ子

雜賀貞次郎 一九二七『牟婁口碑集』郷土研究社

斎藤純 二〇〇一**a**「龍と龍宮の伝承——龍から貝へ——」『ア
ジア遊学』二八 勉誠社

——二〇〇一**b**「法螺の怪——地震鈴と災害の民俗のため
に——」筑波大学民俗学研究室編『心意と信仰の民俗』吉

川弘文館

佐々木滋寛 一九三六『筑前の伝説』九州土俗研究会

C. ザックス（柿木吾郎訳） 一九六五『樂器の歴史』上 全音

樂譜出版社

賤機村 一九一三『賤機村誌』下（写本 静岡県立図書館蔵）

※刊記がないが内容および類書の出版年から一九一三年と
推定。

紫村 一九六一『資料 鞍手郡直方由来記』『直方郷土研究
会会報』二 直方郷土研究会

——編 一九八三『直方市史 資料編』下 直方市役所

白浜町誌編さん委員会 一九八六『白浜町誌 本編』上 白浜
町

震災予防調査会 一九〇四『大日本地震史料 卷之十一』『震災
予防調査会報告』 四六甲 震災予防調査会

J. F. セイフナー・F. M. ギル（杉浦満訳）一九八六

『海からの贈りもの 「貝」と人間』築地書館

高市志友撰・西村中和画 一九八五『紀伊国名所図会』 鈴木

棠三編『日本名所風俗図会』一二 近畿の巻 角川書店

桃山人著・竹原春泉斎画(多田克己編) 一九九七『絵本百物

語』国書刊行会

都司嘉宣 一九七八「東海地方地震津波史料」上『防災科学技

術研究資料』三五 科学技術庁国立防災科学技術センタ

一

中野幡能 一九七七「宝満山修驗の末寺・末社組織」中野幡能

編 山岳宗教史研究叢書一三『英彦山と九州の修驗道』名

著出版

中村高平(橋本博校訂) 一九六九『駿河志料』二歴史図書社

中村幸彦・岡見正雄・阪倉篤義 一九九九『角川 古語大辞典』

五 角川書店

那須晴次 一九三〇『伝説の熊野』郷土研究会

仁井田好古(和歌山県神職取締所編) 一九一〇a『紀伊統風土

記』一行政学会出版部

一 一九一〇b『紀伊統風土記』二行政学会出版部

沼津市教育委員会社会教育課 一九九五 沼津市史編さん調査報

告書八『柳沢の民俗』沼津市教育委員会

四『旧村地誌 金岡村誌 膽根村誌 膽根村沿革誌』沼津市

教育委員会

直方市史編さん委員会 一九七一『直方市史』上 直方市役所

教育委員会

一 一九七八『直方市史』下 直方市役所

榛原町文化財保護審議会 一九七五『ふるさとの伝説』一 榛原

町教育委員会

榛原町民話収集グループ 一九八六『ほらが池 榛原町の民話』

榛原町教育委員会

服部如實 一九七二『修驗道要典』三密堂書店

原小学校 一九一三『原町誌稿』(写本 静岡県立図書館蔵)

人見必大(島田富雄訳注) 一九七六『本朝食鑑』一 平凡社

福井隼仁 一九九〇『法螺の研究』金峯山を中心にして

『音楽学』三六一 日本音楽学会

福岡県 一九三三『筑前国統風土記』福岡県史資料続 第四輯

地誌編』福岡県

藤長庚(神谷昌志修訂) 一九九一『遠江古蹟図絵』明文出版社

藤原良章 一九八九『法螺を吹く』網野善彦・笠松宏至・勝俣

鎮夫・佐藤進一編『ことばの文化史 中世 3』平凡社

前田勇 一九六四『近世上方語辞典』東京堂

南方良楠 一九七一a『田原藤太龍宮入りの譚』『南方良楠全集』

一 平凡社

一 一九七一b『本邦における動物崇拜』『南方良楠全集』

宮家準 二〇〇〇『役行者と修驗道の歴史』吉川弘文館

二 平凡社

宮田登 一九八七『終末観の民俗学』弘文社

八木洋行 一九九七『地名が語る自然災害』『静岡の文化』五〇

静岡県文化財団

柳田国男編 一九三七『山村生活の研究』民間伝承の会

一九六八「海神宮考」『定本 柳田国男集』一筑摩書房

一九六九「海神小童」『定本 柳田国男集』八筑摩書房

一九七〇「山島民謡集」一『定本 柳田国男集』二七筑

摩書房

やなべの歩み編集委員会 一九八五『やなべの歩み』岩滑コミ

ユニティ推進協議会

〔付記〕 本稿の内容は、本学会のほか、世間話研究会、歌謡

研究会・比較民話研究会合同研究会で発表し、有益な助言を得た。また、資料について、文中で記した以外に牛島史彦氏、大嶋善孝氏、荻野裕子氏の協力を得た。感謝いたします。

(さいとう・じゅん／天理大学)